

20万分の1 海洋地質図(海洋地質図 25)

「釜石沖表層堆積図」

編集 有田正史・木下泰正

発行 工業技術院地質調査所

取扱先 東京地学協会 (03)261-0809 262-1401

そのほか全国主要書店

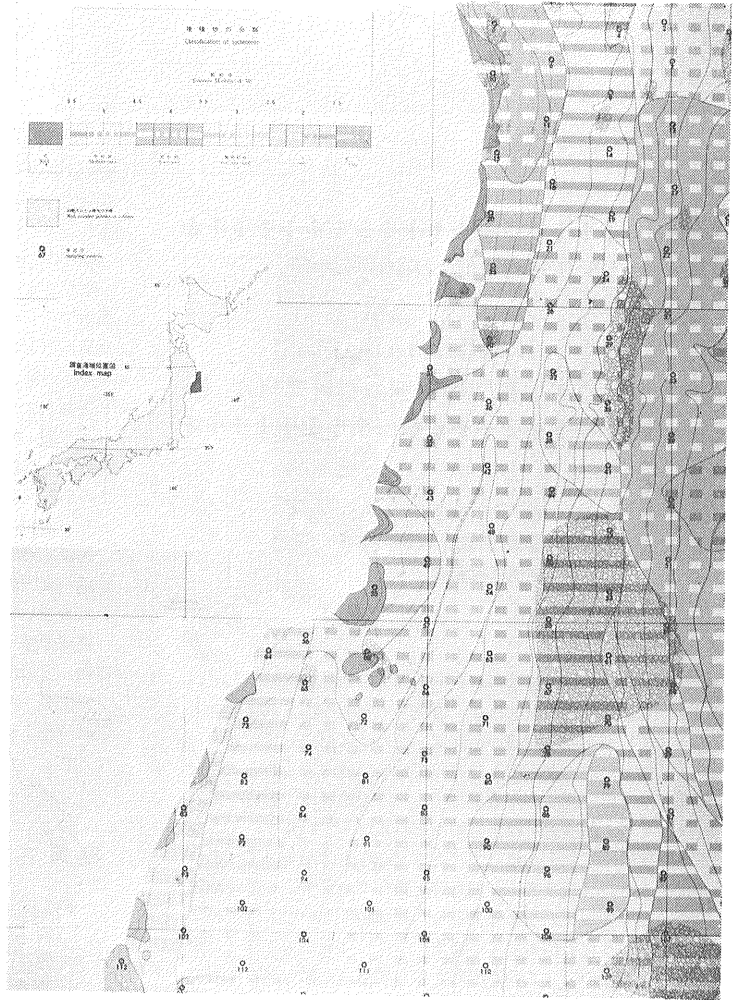
価格 2,770円

本図幅の沿岸部はリアス海岸が典型的に発達するところである。複雑に屈曲する海岸線は美しい景観を作り出し 景勝地として知られ また湾入部は漁港 商工業港として東北日本の産業を支えている。

リアス海岸の発達する沿岸部の海底地形は海に向って突出する半島部周辺で急傾斜をなす。半島と半島の間の湾入部には 陸上の谷に続く谷地形が存在していて陸上地形のなごりをとどめている。その沖合には平坦な大陸棚が広がるが リアス海岸の沖合では大陸棚外縁の水深が深い。平滑な海岸線をなす八戸沖海域では 大陸棚外縁深度は-150m~-160mで一般的な外縁深度を示す。

しかし 久慈沖付近より南下するにしたがい外縁深度は増大し 宮古沖では水深 350m 釜石沖付近では水深 500m 程を示し さらに南部では水深 1,000m の地形勾配変換点へ続くものと見られる。この地形を覆う表層堆積物の分布は平滑な海岸線で一般的な大陸棚外縁水深を示す八戸沖海域では粗粒堆積物から細粒堆積物への粒度変化が数帯 海岸線に平行に帯状配列をなす。これに対し リアス海岸で深い大陸棚外縁水深を示す釜石沖海域では八戸海域に見られるような堆積物の帯状配列は認められず 極細粒砂が広く分布する。この堆積物の分布様式の違いは 両海域における海底地形発達史の違いを如実に示すものであり 堆積物中には海底地形発達過程の謎が埋まっているといえる。したがってこの海域の堆積史を紐解くことによって東北日本太平洋岸の海底地形発達史はさらに明らかなものになるであろう。

本図幅は 従来 骨材資源探査の分野で用いられてきた粗粒率の概念に基づいて堆積物の粒度分類を行っている。これは堆積物を数値化し 堆積物中における各々の粒径粒子の混合状態をあらわそうとするものでその値には中央粒径値 洶汰度及び歪度の概念が含まれる。このため これまでの中央粒径値分類表示では不明であった堆積分布の特性が明らかとなり 堆積物の形成順序を読みとることができる。学術的側面のみならず 本図幅からは海底骨材



資源等の賦存域を直接的に読みとることも可能であり 今後の海洋の開発 空間利用に際し 大いに利活用されるものと考えられる。なお 粗粒率による堆積物の分類手法については付図に詳しく記されていて 今後の堆積物の研究に参考になるものと思われる。